

ティーチング・ポートフォリオ

西川 誠

(記入日： 令和 2年 9月 4日)

1 教育の責任 (何をやっているか：担当科目：令和2年度前期)

日本史研究入門(1) (1年前期必修)

日本史演習(3) (3年通年選択必修) 史資料演習 (4年通年必修(複数開講))

文献講読(1) (2年後期選択必修) 特殊研究 (4年通年必修(複数開講))

卒業論文 (4年通年必修(複数開講))

2 理念 (なぜやっているか：教育目標)

①日本史学に関する基礎的知識を習得すること

②日本史学における課題を見つけ調査する能力を涵養すること

それを一般的な調査検討能力に拡充すること

③収集した情報を基に思考し、まとめ、分かりやすく提示する能力を身につけること

④独断的観念体系に陥らない思考を身につけること

3 方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)

①については、学生の基礎的能力に合わせた教材を作成した。【日本史研究入門(1)・文献講読(1)】(エビデンス1)

②の前半と③については、学生にレジメを作成させ、報告、ディスカッションを行わせた。【日本史演習(3)・史資料演習・特殊研究・卒業論文】(エビデンス2)

④については、演習に於いて指導している。【日本史演習(3)・史資料演習】(エビデンス2)

4 成果 (どうだったか：結果と評価)

①については、概ね学生の反応は良い。(エビデンス3)

②③については、オンラインのため学生の発表回数が少なくなり、例年よりレジメの作成回数が少ない。④については、進行中。

5 今後の目標（これからどうするか）

①については、毎年の改良を重ねていくとともに、リアクションペーパーの反応を反映させる。ここ2年の学生は、歴史を構造的に捉える力が弱い。意識的に補っていく。

②③については、事前学修の促しと、報告者への指導を重ねていく。

④については、今後も指摘していく。

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

1 各授業の配布レジメ・史料（非公開）

2 学生の作成したレジメ集（非公開）

なお日本史演習(3)で用いた教材は以下の通り。

・鈴木淳・西川誠・松沢裕作編著『史料を読み解く4 幕末・維新の政治と社会』（山川出版社・平成19年）

3 チームスのチャット フォームスの自由記述質問（非公開）

授業評価アンケート

ティーチング・ポートフォリオ

戸澤純子

(記入日: 2020年9月23日)

1 教育の責任 (何をやっているか: 担当科目) 基礎ゼミナール (1年、前期、必修科目、2単位)、プレゼミナール (1年、後期、必修科目、2単位)、情報リテラシー1年、前期、必修科目、2単位)、観光心理学 (1年以上、後期、選択必修科目、2単位) ライフ・プランニング (1年以上、前期、共通教育選択科目、2単位) など

2 理念 (なぜやっているか: 教育目標)

学ぶことは自分自身にも、周囲の人たちにも大きな影響がある。それは単に資格取得や就職などの直接的な活動に直結する以上に、重要な意味があることを大学生の時期に気づいてほしいと考えている。大学時代に学ぶ習慣を身につけ、問題に自ら気づき、主体的に問題解決を図る力を身につける機会を提供したい。

3 方法 (どのようにやっているか: 実践の工夫)

オンライン授業においては、学生と自身の通信環境の悪さから、主に資料を提供し、学生に自習を求める授業形式が多かった。その中でも、基礎ゼミナールのような少人数のゼミ形式の授業では、オンライン上で3名程度のグループに分けて、特定のテーマに関するディスカッションを行う工夫をした。ライフ・プランニングにおいては、女性の人生において避けて通ることのできない妊娠や出産の問題を神奈川県公式の YouTube で学習してもらうなど、学習教材の工夫を行った。観光心理学においては、理論の紹介の際にはできる限り実際の具体例を多く挙げて、学生たちの日常的な行動と関連付け、自分の問題として様々な事象について考えられるように工夫した。

4 成果 (どうだったか: 結果と評価)

オンライン授業の全般で Microsoft Forms 等による振り返りの小テストを繰り返して行い、概念や理論の理解の助けとした (エビデンス 1)。基礎ゼミなどの少人数授業では、Microsoft Teams の会議機能を使うことによって、学生のテーマによる発表やプレゼンテーションを行い、授業メンバーの学修の理解度の確認を行った (エビデンス 2)。観光心理学においては、授業中の質問やリアクションペーパー、Microsoft Teams でのチャットの内容から、自分の問題として事象を理解することができたどうかを確認した (エビデンス 3)。

5 今後の目標 (これからどうするか)

様々な授業を振り返り、学生たちの学ぶ意欲や資料を読み解く能力、コミュニケーション能力をこれまで以上に向上させたい。これは一度の授業で容易く達成できる問題ではなく、時間を要する。このため、これまで以上に客観的な資料を基にしたグループディスカッション、個人の考えをプレゼンテーションする機会を作り、学生指導に当たる予定である。

6 エビデンスとなるもの (資料の種類などの名称)

- 1 Microsoft Forms による振り返りテスト (非公開)
- 2 授業発表資料、Microsoft Teams での会議機能 (非公開)
- 3 リアクションペーパー、Microsoft Teams でのチャット (非公開)

ティーチング・ポートフォリオ

田中 実

(記入日：2019年9月4日)

1 教育の責任 (何をやっているか；担当科目：令和2年度前期)

観光英語特講 I (2~4 年前期選択必修科目 2 単位)、観光グローバル英語 III (2~4 年前期選択必修科目 2 単位)、観光文化アメリカ (2) (1~4 年前期選択必修科目 2 単位)、観光文化実践 VI (2~4 年前期選択必修科目 2 単位)、観光文化専門演習 I (3 年前期必修科目 2 単位)、観光英語基礎 I (1 年前期必修科目 1 単位)、観光英語 I (2 年前期必修科目 1 単位)、共通英語 I(1) (1 年前期必修科目 1 単位)。

2 理念 (なぜやっているか：教育目標)

- 観光英語特講 I、観光グローバル英語 III：日本・海外の観光を英語で理解し紹介できること
- 観光文化アメリカ (2)：アメリカの自然、文化、歴史、政治・経済、観光地の概要を学び、この国の基礎的な知識、理解を得ること
- 観光文化実践 VI：実際に観光の現場を見ることで、「現場」の重要性、そして実体験の重要性を学ぶこと
- 観光文化専門演習：アメリカについての専門的な知識の入門
- 観光英語基礎 I、観光英語 I：観光産業を目指す学生に観光に関わるさまざまな実用的英語を習得、習熟してもらうこと
- 共通英語 I(1)：高校までの英語を確認し、基礎学力の発展をはかること

3 方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)

- 観光英語特講 I、観光グローバル英語 III：観光英検の過去問題集を用いて小テストの繰り返しとまとめのテストを行う。
- 観光文化アメリカ (2)：プレゼン・ソフトによるレクチャーとその資料配布。学生による授業レポートの提出。授業振り返りのコメントの欄も用意。
- 観光文化実践 VI：毎回都内の人気インバウンド観光スポットについて多くの画像を参照しながら学習。該当スポットに関する事前問題を用意した。
- 観光文化専門演習：アメリカに関する主要テーマに関して資料とそれに関する問題の配布。レポート。
- 観光英語基礎 I、観光英語 I：実践的な観光英語テキストを使用し、課題をこなしてもらう。
- 共通英語 I(1)：コミュニケーションなテキストを使用し、総合的な英語学習を行う。

4 成果 (どうだったか：結果と評価)

- 観光英語特講 I、観光グローバル英語 III：全体として学生は小テスト、まとめのテストにおいて高得点をとっている。
- 観光文化アメリカ (2)：概ね学生のレポートはよくできている。授業内容に関するコメントの提出も少なくない。
- 観光文化実践 VI：事前問題の提出頻度は高い。最後のレポートはまずまずであった。
- 観光文化専門演習：概ね提出課題、レポートの出来具合は良い。

- 観光英語基礎 I、観光英語 I：課題の提出頻度は高かった。課題の内容も悪くなかった。
- 共通英語 I(1)：課題の提出頻度は高かった。課題の内容も悪くなかった。不十分なクラス分けが理由と思われるが、一部学生には明らかに使用テキストが難しすぎた。

5 今後の目標（これからどうするか）

- 観光英語特講 I、観光グローバル英語 III：後期は教室での小テストになるので、もっとしっかりした学習を行ってもらおう。
- 観光文化アメリカ(2)：教室で行うので、もう少し豊富な内容を扱う。
- 観光文化実践 VI：現地訪問を行い、体験してもらおう。
- 観光文化専門演習：アメリカについてさらに広く深く学習してもらおう。自分のテーマ設定を行い、その発表をしてもらう。
- 観光英語基礎 I、観光英語 I：学習内容をさらに深めていく。
- 共通英語 I(1)：教室で行うので、もう少し豊富な内容を扱う。

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

- 1 各授業の小テスト、テストの問題と結果（成績結果は非公開）
- 2 各授業でのパワポ資料
- 3 学生の授業ノート、学生の授業振り返りコメントのコピー（非公開）

ティーチング・ポートフォリオ

柳川 悦子

(記入日:令和2年9月25日)

1 教育の責任 (何をやっているか:担当科目)

「観光の情報デザイン(1)」(前期選択必修科目)、「観光の情報デザイン(2)」(後期選択必修科目)、「観光文化実践Ⅹ」(前期選択必修科目)、「観光文化実践Ⅳ」(後期選択必修科目)、「旅行業務取扱管理者講座(1)」(前期専門科目・国家資格取得)、「旅行業務取扱管理者(2)」(後期専門科目・国家資格取得)、「基礎ゼミナール」(1年前期必修科目)、「プレゼミナール」(1年後期必修科目)、「観光文化入門演習」(2年後期必修科目)、「観光文化専門演習(1)」(3年前期必修科目)、「観光文化専門演習(2)」(3年後期必修科目)、「現代の社会」(選択必修科目)、「観光学」(選択必修科目)、「卒業研究演習(通年)」(4年必修科目)など。

2 理念 (なぜやっているか:教育目標)

- 学生自身が、観光産業という多様性に富んだ社会を理解し、コミュニケーション力や協調性といった可視化できない社会人基礎力を磨いていくことを目指している。
- 国家資格である「旅行業務取扱管理者」の合格者を一人でも多く輩出すること。
- 担当者が実務家教員として、航空会社の広報・マーケティングの現場に長年勤務して培った観光に関する知識を活かし、観光の総論的知識や枠組み、関連業務のあり方について、学生がきちんと理解できることを目指している。

3 方法 (どのようにやっているか:実践の工夫)

- 今年度前期は、すべての授業がオンライン(遠隔授業)で行われたため、特に、1年生の基礎ゼミナールでは、各自のネット環境を考慮しつつ、ほぼ毎回オンライン双方向授業を行い、ひとり一人の学生の不安を取り除くよう、丁寧に「レポート、レジュメの書き方」などの基本的な学びはもとより、観光関連の仕事にも興味を持ってもらえるような身近なトピックを取り上げて指導を行った。
- 「観光文化実践Ⅳ」では、コロナ禍のため、実際に各観光関連企業に実習に行けない代わりに、外資系ホテルの総支配人、航空会社の支社長、雑誌コラムニストなど、学生が興味を持っている仕事のプロフェッショナルにオンラインでご登壇いただき、それぞれの業界について普段聞けないお話を伺うと共に、メールにて双方向から質疑応答を行った。

4 成果 (どうだったか:結果と評価)

- 前期は、オンライン授業であったため、ほぼすべての授業で課題を出し、学生も

その課題を提出するだけでも、大変な作業だったと推察するが、逆に、オンデマンドで、授業資料を Teams の各チームに貼り付けたため、学生はわからなかったところを繰り返し見て、勉強する事ができて良かった、という意見も多かった。

ー 国家試験取得のための科目である「旅行業務取扱管理者講座」については、オンライン授業では、なかなか学習ポイントを絞りきれず、学生が自分自身で受験勉強に取り組んでいく姿勢をひっばっていくことができなかつたことを反省している。

5 今後の目標（これからどうするか）

ー 後期からやっと学生の顔を見ながらの対面授業を行うことができているので、新型コロナの感染対策に十分に留意しながら、グループワークなど行って、他の学生の考えなどを知る事により、問題意識を持ち、多様性を重んじ、協調性を育む、というような学生の主体的な学びを促したい、と考えている。

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

2020 前期の講義科目については、授業教材に即した資料や、毎回の課題のやりとり、学生からの提出物に対する評価についても、Teams の各チームにすべて残されている。

また、国家資格に関する科目については以下のテキストを使用している。

児山寛子『一発合格！国内旅行業務取扱管理者試験テキスト&問題集』ナツメ社、
『国内観光地理サブノート』 JTB 総合研究所

以上

ティーチング・ポートフォリオ

川村学園女子大学生活創造学部
観光文化学科 中山 穂孝

(記入日：2020年9月25日)

1 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)

世界遺産(1)(2～3年次前期選択必修科目 2単位)、日本地誌/日本・世界地誌(1)(1～2年次前期科目選択必修科目 2単位)、世界地誌/日本・世界地誌(2)(1～2年次前期科目選択必修科目 2単位)、地誌学(1)/地誌学(2～3年次前期科目選択必修科目 2単位)、観光歴史学(1～2年次前期科目選択必修科目 2単位)、観光文化総論(1)(1年次前期必修科目 2単位)、観光文化(日本)(1年次前期必修科目 2単位)、観光文化専門演習(1)(3年次前期必修科目 2単位)、卒業研究演習(4年次通年必修科目 4単位)

2 理念 (なぜやっているか：教育目標)

講義科目は、観光の基礎的な知識や理論を固めつつ、日本及び世界で発生している観光現象の特徴や問題点を考察できる力を養うことを目標としている。観光地や観光資源などの特徴をただ暗記するだけではなく、その特徴の背景や形成過程を含めた広い視点で観光を捉える能力を身に付けてもらいたい。演習科目では、講義科目で身に着けた観光に関する基礎的な知識を活用しながら、自らテーマを確立し、独自の視点から主体的にレポートや卒業論文を完成させることを目標としている。

3 方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)

2020年度前期は新型コロナウイルスの影響によってオンライン授業を実施した。講義系の授業は、レジュメ内容を解説した動画を視聴しながら、レジュメを読み進める方法を採用した。さらに学びを深めるため1回の授業で課題を2つ出し、それぞれ50字～70字程度自分の考えをまとめる時間を設けた(エビデンス1)。これらの課題に対する学生たちの考えは、次回授業の冒頭で、履修者全体で共有した。また、授業内容に関する質問には、Microsoft Teamsを活用し、リアルタイムで対応し、学生の学びの質を保つよう努めた(エビデンス2)。演習

系の授業では、Microsoft Teams のオンライン会議機能を活用し、対面授業と同じようなゼミ運営を進めた。3年生が履修する観光文化専門演習(1)では、論文購読を通して観光学分野に関する基本的な理論や事象を確認し、卒業論文のテーマ決めにつなげた。4年生が履修する卒業論文演習では、各自資料調査を実施し、卒業論文の作成を進め、適宜アドバイスをを行っている。

4 成果（どうだったか：結果と評価）

講義科目は、期末レポートと毎回の課題、質問などから、知識の習得度や考察力を総合的に評価した。その結果、授業内で扱った基本的な理論や事象は概ね理解していた。しかし、学生たちがレポート上で言及している観光現象が持つ問題点は、どれも普遍的なものであり、各観光地が持っている独自性のある問題点や観光地の特徴に関する記述が少なかった。この点については、まだまだ向上の余地が残されており、来年度の課題としたい(エビデンス 3)。

演習科目は、数回のレポートや演習内での発表内容などによって評価した。レポートは徐々に文章作成能力の向上が見られ(エビデンス 3)、独自の視点を盛り込んだ発表もあり、有意義なものであった。

5 今後の目標（これからどうするか）

2020年度前期はオンライン授業ということもあり、授業における学びがどの程度理解され、定着しているのかを評価することが困難であった。しかし、対面授業であった2019年度と比較しても、授業内で学生から発せられた質問は量・質ともに向上しており、オンライン授業という環境ながらも多くの学生が積極的に学ぶ姿勢を持っていたことがわかった。こうした積極的な姿勢に少しでも応えることができるように授業方法をますます改善していきたい。

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

- (1) 授業内課題と共有(非公開)
- (2) 授業内容に関する質問と回答(非公開)
- (3) 各種レポート(非公開)